博士学位論文審査要旨

２０１５年6月20日

論 文 題 目： 実存の危機と言語の危機――R・M・リルケの詩学に関する芸術学的考察――

学位申請者： 池田 まこと

審 査 委 員：

主 査： 文学研究科 教授 岡林 洋

副 査： グローバル・コミュニケーション学部 教授 三ツ木 道夫

副 査： 大阪大学大学院文学研究科 准教授 吉田 耕太郎

要 旨：

本論文は、オーストリアの詩人であるリルケ（Rainer Maria Rilke, 1875-1926）の創作活動が停滞し、彼がいわゆる言語危機におちいったとされる時期（1910 年～1922 年）に焦点をしぼろうとする独特の観点に立つ研究である。しかも現代美学そしてウンベルト・エコの言説においていわば定説となっているいわゆるモダニズム芸術が新たな表現を求めてついに沈黙に陥った云々の文脈とは全く異なり、本論文はむしろ美学思想史的、哲学的文脈での一種の危機の契機がリルケのこの時期に見出されると主張するものである。実存的危機がリルケの言語危機と表裏をなしているという観点に関して本論文は独創的である。

本論文は、第Ⅰ章において言語危機の様相、要因、克服について、ホフマンスタールやトーマスマン、ニーチェを例に捉えることによって、リルケの言語危機問題を捉える広い文脈の存在を解明している。言語危機告白の代表と見なされる『チャンドス卿の手紙（*Der Brief des Lord Chandos*）』の著者ホフマンスタール（H von Hofmannsthal,1874 - 1929）の言語危機以降に起こった身体表現への注目は、それとは対照的なリルケを浮かび上がらせる。詩人にとっての危機の克服が論述される際、ホフマンスタールの、言語から離れて身体表現に接近する言語危機克服のタイプが明確となることにより、リルケのそれが対照的に言語そのものに回帰するタイプであることが浮かび上がる。

リルケの言語危機に関する先行研究が十分に踏まえられていることも確認できる。研究史の最初期におけるヴォトケ、最新のクルーヴェ、そして特に、リルケ作品と現実との紐帯が意識的に断たれていることを指摘するシェパードの研究が主に参照されている。

第Ⅱ章においては、まず言語危機以前のリルケに見られる、ロダン（Auguste Rodin, 1840-1917）らの造形芸術への接近に言語危機の要因と、クルーヴェの指摘を踏まえ『マルテの手記（*Die Aufzeichnungen des Malte Laurids Brigge*）』（1910）に言語危機の前兆とが、見出され、『ドゥイノの悲歌（*Duineser Elegien*）』（1912-1922）の第１歌冒頭にその明確な徴候の表れが告げられる。自らの精神的支柱のなさと孤独や実存的不安が、リルケの言語危機と密接に関係しているとの本論文での主張はクルーヴェの先行研究によるところが多い。詩人は、もはやかつてのように造形芸術の感覚性や作品全体を一時に把握する空間性を詩に期待できなくなっており、言語という表現媒体が詩人の目指した造形芸術的表現と「不和」な関係にあることも明白である以上、言語による限界ある造形芸術への接近をリルケは断念せざるを得なかったことを本論文は詳細な資料を提示しながらみごとに論述している。

第Ⅲ章では、本論文の独自性を示すものとして評価できるリルケの言語危機解決が論述の対象とな

っている。シェパードの先行研究を参照しながら、リルケが『悲歌』において現実と作品との不和を解消するために用いた手法が、対象のない言語表現（虚構的表現）であったことが主張されるが、まだこの先行研究ではこの詩人の危機の克服の試みに積極的な意味が認められてはいない。本論文の研究の成果として最後に挙げるべきは、『悲歌』の主要なテーマに、ロマン主義的な「愛と死」の概念が取り入れられていることが指摘されていることである。リルケと「愛と死」との実際的なかかわりを確認することは今後の課題であるが、本論文では、初期リルケに指摘される新ロマン主義的傾向とは異なるロマン主義との関連から、リルケの言語危機を浮かび上がらせるよう試みられていると言えるだろう。ここにもし実存への不安を絵画作品にした画家などとの比較例が加わるならば、本論文の比較美学的、芸術学的な論述の広がりはなお一層増すことになるであろう。
よって、本論文は、博士（芸術学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１５年6月２０日

論 文 題 目：　実存の危機と言語の危機――R・M・リルケの詩学に関する芸術学的考察――

学位申請者：　池田　まこと

審 査 委 員：

主　査：　文学研究科　教授　岡林　洋

副　査：　グローバル・コミュニケーション学部　教授　三ツ木　道夫

副　査：　大阪大学大学院文学研究科　准教授　吉田　耕太郎

要　　旨：

上記審査委員は、学位申請者池田まこと氏に対する総合試験を 2015 年 6 月 20 日午後 1 時から、約 3 時間実施した。

総合試験において学位申請者は、提出された論文の内容に関する口頭試問に対して、適切に応答し、論文の意義とその研究水準の高さを示すとともに、主題の背景となる美学史的な理解についても広範な専門的知識を有していることを明らかにした。

また、語学試験（ドイツ語、英語）においても、学位申請者が研究上要求される外国語文献の解読能力を十分有していることが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 実存の危機と言語の危機――R・M・リルケの詩学に関する芸術学的考察――

氏　　名： 池田まこと

要　　旨：

本研究はライナー・マリア・リルケ（Rainer Maria Rilke,1875-1926）の言語危機について、その様相、要因、そしてその解決にわたって論じるものである。

リルケは 20 世紀初頭のドイツ語圏を代表する詩人のひとりである。では、彼はいかなる詩作を行っていたろうか。例えば、リルケの文学史的な再位置づけを試みる植和田は、リルケをそれまでの抒情詩の枠を超えた詩作を試みる前衛性と同時に、ドイツ的伝統・因習につながる感傷的・観念的・宗教的代償的傾向を併せ持つ詩人として評価している。

このような、いわば過渡期的な性格の詩作を行っていたリルケが生きた当時のヨーロッパもまた、世界観や価値観の大きく変動しつつある時代にあった。本研究の主要な話題である言語もまた、こうした変化の波に乗って、従来とは異なる様相を呈していたと言えるだろう。すなわち、言語危機（Sprachkrise）が生じているのである。

言語危機（以下「危機」とも表記）とは、1901 年にホフマンスタールが発表した『チャンドス卿の手紙（*Der Brief des Lord Chandos*）』を皮切りに、ドイツ語圏に広く生じた現象である。その呼び名のとおり、言語の危機的状況、すなわち、従来言語に当たり前に備わっていると信じられてきた、認識や思考、あるいは表現といった諸機能の不全を各作家が告白し、反省することを主に指す。このような言語の不全の訴えは、先のホフマンスタールをはじめ、カフカやトーマス・マン、リルケ、また彼らの先駆けとしてニーチェなどにしばしば指摘され、また論じられてきた。

日本でも言語危機に関する研究は少なからず行われてきた。それは主に作家の個別研究の一部であることが多かったように思われる。しかし、この、言語と現実の乖離を示す「言語危機」は、いましがた述べたように、個々の作家に留まらぬ、20 世紀初頭のドイツ語圏全体を覆うものである。したがって、第Ⅰ章でこうした「危機」の様相・要因・解決について、ホフマンスタールやトーマス・マン、ニーチェを例として広く論じることは、以降で取り扱うリルケという一人の作家を、より大きな文脈で捉えることを可能にするだろう。

あるいは、日本における従来の研究は概して、その「危機」が、各々の作家のどのような発言や振る舞いに現れているかということを論じるに留まっていたように思われる。よって、本章で「危機」の要因や解決を、包括的な観点から論じることは、従来の「危機」研究に欠けていた部分を補うことになるだろう。特に「危機」の要因に関しては、比較的言及に乏しいように思われる。ここでは「危機」の要因を、ここでは後進的地域であったドイツ語圏に訪れた、物質面での急激な近代化に、旧態然とした精神面が適応できないという歴史的背景に求めている。

第Ⅱ章では、リルケの「危機」に迫る。第Ⅰ章で論じたような歴史的背景によって、リルケは自らの精神的支柱のなさを感じ、孤独や実存的不安を覚えていた。ごく最近の研究者であるクルーヴェも認めていることだが、このような実存的危機とリルケの「危機」とは、密接しているのである。

この精神的支柱のなさは、翻って、詩人の感覚的なものへの偏愛とも言えるほどのこだわりを生むことになる。すなわち「危機」以前のリルケは、ロダンやセザンヌの芸術作品を理想とし、『新詩集』（*Neue Gedichte*, 1907,1908）において、詩における造形芸術への接近を試みていた

のである。

リルケのいくつかの発言からは、彼が、造形芸術の直接的な感覚性はもとより、見る側がいちどきに作品全体を把握し得る空間性を詩にも獲得しようとしていたことが窺われる。しかし、やはり詩にはそうした空間的表現は困難である。このような詩人の目指す造形芸術的表現と、それを行うための言語という媒体との不和が、リルケを襲った危機の要因の一つではないかということをここでは論じている。

造形芸術への接近によってむしろ言語に限界をおぼえたリルケは、死と愛とを大きなテーマとした『ドゥイノの悲歌(*Duineser Elegien*)』(1912-22)(以下『悲歌』とも表記)を通じ、言語特有の表現に回帰する。すなわち、虚構的表現である。第Ⅲ章はこうした虚構的表現によるリルケの危機解決について論じている。また、従来この「死」と「愛」のテーマと、「危機」解決との関わりが論じられてこなかったため、本研究ではとりわけこの点に注目している。

そもそも初めて『悲歌』に虚構的性格に類する人工的性格を見出したのは、おそらくシェパードであろう。彼はしかし、この『悲歌』に見られる人工性、すなわち現実との乖離にこそ、リルケの「危機」を指摘したのである。

しかし本研究ではこの虚構性こそを積極的に評価したい。なぜなら、このような虚構性を前提としてこそ、『悲歌』の後に成立する『オルフォイスに寄せるソネット(*Die Sonette an Orpheus*)』(1922)の偏在的な自己が可能であると考えられるからである。言い換えれば『悲歌』において詩人は、変幻自在な自己を虚構しはじめているのである。自己の虚構的形成は、「第1歌」・「第2歌」の一部に見られる語りの構造、すなわち、二人称から一人称へと移行し、過去から現在へと時制が移る語りの構造に指摘しうる。

特に「第1歌」において、このような語りの構造が指摘される箇所には、「銘文」というモチーフが同時に登場している。このモチーフは、かなり明確に、文字としての言語を想起させるだろう。このような、「文字」の登場を、先のような二人称から一人称へと移行し、過去から現在へと時制が移る語りの構造と合わせて考えると、識字の経験に思い至るだろう。

バリー・サンダースが論じるには、我々は文字を介して、反省的に物事を認識するという。興味深いことに、この反省的認識が行われるのはいわゆる我々の内面においてだが、その内面は、この認識と同時に作り上げられているのだと彼は述べている。すなわち、文字という形での言語を介して我々の内面は我々によって作られているのである。「第1歌」に指摘される過去形から現在形への時制の移行は想起や反省を示し、二人称から一人称への移行は、この反省による自己の獲得を示しているとするならば、この移行と同時に現れる「銘文」は、サンダースの述べるような自己の内部を形成する言語として解釈することができるのではないだろうか。

さらに、こうして虚構された自己は、どこまでも拡張する。すなわち、地上的存在をすべてそのうちに含み、はかない現世より解放することができるほどである。この虚構された自己の拡張は、「第7歌」・「第9歌」において見られる。すなわち、「第7歌」の冒頭を飾る「詩人の叫び」がそれと同じくらい純粋だという「鳥の声」に同化し、その響きの時空を超えて広がってくさまが描かれる。また「第9歌」では、日常的な時空の観念にとらわれているために、有限ではかない地上の全存在を、人間が「言う」ことで自身の内面へと迎え入れることによって、日常的な枠組みから解放することが要請されているのである。

こうした一連の詩作には、詩人が現実と乖離した言語を、拡張する自己という現実にとらわれぬ表現が可能な媒体として受け入れていることが窺われる。すなわち、リルケは言語を新たにとらえなおし、再び活かそうとしているのである。またこの自己の拡張は、あらゆる地上的存在との融和を促すことによって、詩人を孤独からも解放するだろう。特に、「第9歌」の「おそらく私たちがこの世に存在するのは、言うためだろう」というフレーズは、このような言語危機の解決と実存的危機の解決を象徴するものだと考えられる。

しかしこうしたイマジナリーな表現は、繰り返しになるが、「危機」以前の、特に1902年から

1910 年にかけて、リルケが追及したリアルな表現とはまったく異なっている。あるいは、芸術にリアリティとの紐帯を求める根強い考え方とも相容れないものである。このような芸術観からすれば、リルケの芸術は無意味なものになりかねない。

しかしまた一方で、芸術の虚構性を積極的に評価する伝統も存在する。すなわちロマン主義以来の芸術観である。ロマン主義は虚構性に脱日常的性格を認め、それを追求していた。あるいは、ロマン主義は芸術と同様に「愛と死」というテーマにも脱日常的性格を認め、その位相の近さを示唆する。リルケの場合も同様に、「第 9 歌」において、「死」と「愛」とそして詩作とが、結び付けられている。そのような類似性から、リルケはこのロマン主義的思想を意識的に継承しているのではないかと推測される。すなわち彼は、伝統という権威でもって、リアリティとの紐帯を絶った自らの芸術に正当性を持たせようとしたのではないかと結論した。